



中国語母語話者におけるイ形容詞習得研究 : 縦断的データと横断的データによる習得モデル構築の試み

木下, 謙朗

(Citation)

Learner Corpus Studies in Asia and the World, 3:207-220

(Issue Date)

2018-03-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010128>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010128>



中国語母語話者におけるイ形容詞習得研究
 —縦断的データと横断的データによる習得モデル構築の試み—
 木下 謙朗(龍谷大学)
 kinoshita@econ.ryukoku.ac.jp

Acquisition of I-adjectives by Chinese Learners of Japanese as a Second Language
 —An Attempt to Construct an Acquisition Model Based on the Longitudinal and the Cross-Sectional Data—
 KINOSHITA Noriaki (RYUKOKU University)

概要

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の縦断的自然発話データである C-JAS (中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断コーパス) と横断的発話データである KY コーパス (第二言語としての日本語学習者の話し言葉) を利用し、学習時間の変化にともない使用するイ形容詞の難易度、頻度傾向の変化を明らかにし、イ形容詞の中間言語文法の実在を探ることを目的としたものである。C-JAS データにある中国語母語話者 3 名と KY コーパスの中国語母語話者 30 名が使用したイ形容詞をすべて抽出し、正用・誤用、難易度、頻度傾向について分析した後、修飾部と述部で現在形として使用されるイ形容詞の活用形態の変化について分析した。その結果、日本語学習時間の増加、習熟度の上昇にともなうイ形容詞の使用頻度、難易度、頻度傾向の変化はコーパスによる違いがみられた。一方で、各学習者に共通した活用形態パターンの存在が明らかになり、中間言語文法の実在が認められる結果が得られた。

キーワード

中間言語文法, 活用形態, 習得モデル, イ形容詞

1. はじめに

学習者の産出物を分析する際、「対照分析仮説 (contrastive analysis hypothesis)」(Lado, 1957) では学習者の L1 と L2 を比較することで類似点や相違点を見出し、L1 と L2 の相違点が誤用の原因であるとし、習得が困難になる (負の転移) と考えられてきた。しかし、学習者の母語が異なっても同じ誤用形態を産出するケースがあり、対照分析仮説では説明が困難との見方が優勢になってきた。そこで、学習者の言語は L1 から L2 へと移行する性質のものではなく、L2 に向け時間とともに変化する動的なシステム (過程) ととらえられるようになった。

中間言語仮説 (interlanguage hypothesis) は Selinker (1972) が提唱した仮説で、学習者は L1 でも L2 でもない学習者の中で形成される独自の言語体系 (中間言語) を持っており、目標言語に向かってその体系は変化する と主張している。この言語体系が産出された時点では、学習者

の中で独自のルールを用いて安定的に構築された文法システムであるが、通時的にみると、その言語体系が連続して変化しているように観察される。この言語体系の連続体を観察した場合、時間の経過とともにどのような変化がみられるのか、学習者の L1 が異なっても同じような言語体系を構築するのかについて解明することで、L2 習得のメカニズムを明らかにするための一助となると考えられる。

日本語教育における多くの初級教科書では、形容詞が早い段階で導入されているにもかかわらず、上級レベルといわれる程度にまで達しても、活用語尾に関する形態的誤りや語彙自体の習得が不十分な語彙的誤り等がみられる場合がある。形容詞の活用形態についての習得に関する調査はいくつかみられるが、それらは短い期間の縦断的調査や、横断的調査のみの研究にとどまっており、長期的な縦断的データと横断的データを照らし合わせ、習得過程を提示したものは少ない。そこで、本研究では日本語を学習している中国語母語話者の縦断的発話データと横断的データを使用し、形容詞を習得する際にどのような言語体系を構築していくのかについて分析する。

2. 先行研究

形容詞の活用語尾の習得研究には、長友(1993)や家村(2001)、木下(2017)などがある。長友(1993)では、日本語学習者 4 名が日記に記述したイ形容詞過去形の活用形態を、22 週にわたり縦断的に調査し分析している。その結果、「*～いでした」と「*～かった(です)」の共通した誤用を中心に習得段階でいろいろな変異が生じている。ある決まった誤用形態を表出しながら習得していくのではなく、このように多様な誤用形態を表出しながら習得に至る過程を、Gatbonton (1978)が英語の音韻規則習得において述べた拡散モデル(Diffusion Model)で説明している。表 1 は 4 人の学習者が表出した形容詞の活用語尾を、時間の経過にともなう変化を示した習得モデルである。

表 1 形容詞過去形習得の拡散モデル(Diffusion Model 長友, 1993, P.5)

	導入 (Introduction)	習得段階 (Acquisition Phase)	復位段階 (Replacement Phase)
形容詞 (イ形容詞)	[楽し]かった(です)	→ ~か(っ)た(です) → ~かただ／でした → ~いだった／でした → ~くだった	→ ~かった(です)
名詞	[元気]		
形容動詞 (ナ形容詞)	だった／でした [元気]	→ だった／でした	→ だった／でした

家村(2001)では、日本語学習者 11 名が会話中に表出したイ形容詞とナ形容詞の否定形の発達過程モデルを、約 5 か月間の縦断的発話データを用いて分析している。その結果、イ形容詞とナ形容詞の否定形の発達過程について、習得の進度は個人差がみられるが、誤用の消滅には品詞ごとに一定の傾向が観察されるとし、それぞれの発達過程モデルが示されている。

イ形容詞否定形の発達過程

(家村, 2001, P.72)

くない(誤用含む)	くない誤用含む)	
*じゃない	→ *じゃない	→ くない
*ない		

イ形容詞の発達過程で、「～ない」は最も早く消滅する誤用の形態であり、消滅順序は以下のようになる述べている。

*ない > *くない ≥ *じゃない (家村, 2001, P.72)

木下(2017)は、C-JAS(Corpus of Japanese As a Second language)データのうちの韓国語母語話者2名を対象にし、修飾部と述部に出したイ形容詞の活用形態から、習得モデルの構築を試みている。しかし、韓国語母語話者特有の言語体系か否かを解明するには、他の母語話者についても分析する必要があると述べている。

さらに品詞別にみた習得順序については、Kanagy(1994)や Hansen-Strain(1993)が、動詞、形容詞、名詞の否定形について比較している。Kanagy(1994)は三つの品詞の中で形容詞(イ形容詞)の否定形習得が一番遅いと述べている一方、Hansen-Strain(1993)は、動詞に比べ名詞とイ形容詞の否定形が遅れると結論付けている。また、坂本・小山(1997)や野田(2001)においても、イ形容詞の活用が他の品詞に比べ難易度が高いとの報告がある。

以上のことから、品詞の中でも特にイ形容詞の活用は難しく、習得に時間がかかる傾向がある。また、縦断的資料を用い、習得モデルの構築を試みているが、半年程度の縦断的データに限られ、さらに、過去形や否定形などのように限られた活用形についての研究となっていることがわかる。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的とRQ

本研究の目的は、存在するであろう中間言語文法システムの実態を解明することである。そのため、中国語を母語とする日本語学習者の自然発話に表出したイ形容詞の使用状況を調査分析する。具体的には、縦断的データと横断的データそれぞれについて、RQ1 学習時間の増加、習熟度の上昇にともなうイ形容詞の使用頻度、難易度、頻度傾向の度合いについて変化を明らかにし、RQ2 誤用として表出した形容詞の割合と、その活用形態からイ形容詞の習得モデルの作成を試み、中間言語文法の実在を検証する。RQ1 については、学習時間の増加、習熟度の上昇にともない、イ形容詞の使用頻度、難易度、頻度傾向の度合いが上昇すると予想する。また、RQ2 については、レベルの上昇にともない誤用率は徐々に減少し、最終的には誤用表出がなくなる。また、長友(1993)で述べられているような拡散モデルで説明ができる習得モデルが構築できると予想する。学習者の表出する「不完全」な言語は一般的に「誤用」とみなされるが、中間言語の考え方では学

習者自身が作り上げた独自の文法体系に基づいて「文法的に正しく」産出されたものということになり、「誤用」という考え方に疑問がある(迫田, 1998)。筆者も学習者の産出した「不完全」な言語を「誤用」とすることに疑問を感じているが、本稿では一般的に「正用」とされているものと区別をするために、「誤用」という用語を使用する。また、誤用と判断する際、形態的誤りや語彙的誤り、また音声的な誤りなどに分けることができるが、本稿では活用形態の中間言語を探る目的であるため、学習者が使用したイ形容詞の正用と形態的誤りを扱い、分析する。

3.2 データ

本研究では、自然発話コーパスである C-JAS における中国語を母語とする日本語学習者 3 名の発話データと(以下、C-JAS)、KY コーパスと呼ばれる OPI テープを文字化した発話資料のうち、中国語母語話者 30 人分を使用する(以下、KY コーパス)。

3.2.1 C-JAS

C-JAS とは、Corpus of Japanese As a Second language の略で、日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の約 3 年間の縦断的発話コーパスである(迫田他, 2014)。学習者一人につき約 60 分の対話形式で調査され、約 3 年間に一人 8 回調査が行われている。中国語と韓国語をそれぞれ母語とする学習者各 3 名の発話データであるが、本稿では中国語母語話者 3 名の発話データを対象とする。対象者の概要は以下の通りである。

- C1, 女性, 25 歳～28 歳, 1 期:日本語学校, 3～4 期:大学 1 年生, 5～8 期:大学 2 年生
- C2, 女性, 20 歳～13 歳, 1 期:日本語学校, 2～5 期:短大 1 年生, 6～8 期:短大 2 年生
- C3, 女性, 22 歳～25 歳, 1～2 期:日本語学校, 3～5 期:研究生, 6～8 期:大学 1 年生

C1においては、2 回目の調査データが欠損しているため、7 回分のデータを分析対象とする。

3.2.2 KY コーパス

KY コーパスは、ACTFL(全米外国語教育協会)が作成したガイドライン ACTFL(1999)の基準に照らし合わせ、最長 30 分という限られた時間内の面接で、被験者の口頭能力を「機能・タスク」「場面・内容」「テキストの型」「正確さ」の 4 要素で測定された OPI(Oral Proficiency Interview)の自然発話データである。実際は英語、中国語、韓国語をそれぞれ母語とする日本語学習者各 30 名(合計 90 名分)のコーパスであるが、本稿では C-JAS と学習者の母語を統制するため、中国語母語話者 30 名を利用する。

表 2 KY コーパス各母語話者別の下位分類

	初級			中級			上級	超級	計
	下	中	上	下	中	上	上		
CNS	1	2	2	3	4	3	3	7	30
ENS	1	2	2	4	4	2	3	7	30
KNS	2	1	2	2	6	2	6	4	30

(人数)

30 名は初級 5 名, 中級 10 名, 上級 10 名, 超級 5 名にレベルに分けられ, さらに初級と中級は上, 中, 下の三つの下位レベルに分けられ, 上級は二つの下位レベルに分けられている。表出数等については, C-JAS と比較対照するために一人当たりの平均を提示することにする。

3.3 手法

C-JAS においては, C-JAS の検索サイト(<http://c-jas.ninjal.ac.jp/main.py>)を用いて, 中国語母語話者 3 名が修飾部と述部において使用したイ形容詞の抽出をおこない, 形容詞の正用・誤用, 表出位置, 活用形態の分類をおこなった。抽出したイ形容詞を「リーディング チュウ太」(<http://language.tiu.ac.jp/>)の難易度判定ツールを利用し, 日本語能力試験を基準とした難易度を付与した。日本語能力試験は 2009 年度まで 1~4 級の 4 段階レベル設定であったが, 2010 年度に新しく日本語能力試験が開始され N1~N5 までの 5 段階レベルに分類が細かく分かれた。旧試験については国際交流基金他 (2007) で語彙や文型の出題基準が提示されていたが, 新試験では出題基準が非公開となっている。そこで, 旧試験の出題基準と日本語教育語彙表 (<https://jreadability.net/jev/>)を参考にし, 2010 年度から始まった新試験対応 (N1~N5) となっている「リーディング チュウ太」の難易度判定ツールを用いた。

さらに, 表出したイ形容詞の活用形態から習得モデルの構築を試みた。KY コーパスにおいても, 中国語母語話者 30 名が産出した形容詞を抽出後, C-JAS の分類方法と同様に正用・誤用, 表出位置, 活用形態の分類をおこなったうえで, 抽出したイ形容詞に難易度を付与し, さらに活用形態から習得モデルの構築を試み, 中国語母語話者の中間言語文法を探る。

形容詞の使用用法については, 橋本・青山 (1992) が以下の三つの用法 (終止用法・連体用法・連用用法) を挙げている。

- (1) <終止用法> ワインはボルドー産がおいしい
- (2) <連体用法> かつおぶしとこんぶを併用すると, いっそうおいしい煮出し汁がとれる
- (3) <連用用法> ぬかみそをおいしく食べるには, 日常の手入れが必要である

(橋本・青山, 1992, p.201) (下線筆者)

橋本・青山 (1992) では, 終止用法において (1) のように形容詞の終止形で終わる例を挙げているが, 「おいしいです」のような例はみられない。「これからの敬語」(国語審議会, 1952) では, 「形

容詞＋です」を「平明・簡素な形として認めてよい」と謳っていることから、本稿では「おいしいです」のような形も終止用法とする立場をとる。また、「おいしいんです」のような「形容詞＋んです」の「ん(の)」を日本語学では準体助詞と扱う場合があり、その際は「んです」に接続する形容詞の活用形態は「連体形」ということになる。しかし、日本語教育の現場では「んです」は1語として導入・提示されることが多い。山内(2009)では、「んです」が「のだ」の変形語 1語であると認知し、その品詞は助動詞とするべきだと提案している。実際の教育現場においても「んです」は「のだ」の丁寧語として扱うことがおおいことから、本稿では「のだ」を助動詞(相当)と捉え(日本語教育学会編, 2005, p.189), 「おいしい料理」のような連体用法と区別し, 「形容詞＋んです」を終止用法として取り扱うこととする。本稿では、イ形容詞を述部で使用している終止用法と、修飾部で使用している連体用法に焦点を当てて分析する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 学習時間の増加、習熟度の上昇にともなうイ形容詞の使用頻度、難易度、頻度傾向の度合いの変化

4.1.1 イ形容詞の使用頻度

C-JAS におけるイ形容詞の使用頻度については、学習者によって異なっており、特徴的な傾向はみられなかった。C1とC2の使用頻度については、5期以降ばらつきはあるものの、緩やかに上昇しており、C3についてはすべての期において100語前後で推移し、イ形容詞の使用頻度の増加はみられなかった。

表 3 C-JAS 各学習者別のイ形容詞表出数

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期
平均	109.0	131.5	111.0	153.7	117.0	143.0	139.3	140.3
C1	44	—	107	203	124	161	133	165
C2	184	128	125	156	153	169	177	160
C3	99	135	101	102	74	99	108	96

表 4 KY コーパス一人当たりのイ形容詞表出数

	初級	中級	上級	超級
中国語母語話者	9.6	48	61.9	45.8

KY コーパスにおけるイ形容詞の使用頻度については、初級から上級レベルにかけて増加しているが、超級レベルでは減少していることがわかった。これは、木下(2009)で述べられているように、習熟度の上昇に伴いイ形容詞を単独で使用する形容表現から、「～ような」、「～みたいな」などが付いた複合的な形容表現である「複合形容表現」の使用が増加したためではないかと考えらえる。

4.1.2 イ形容詞の難易度

学習時間の変化にともなうイ形容詞の難易度変化を観察する。難易度については、2010 年度以降に実施されている日本語能力試験の最も難しい N1 レベルから最も易しい N5 レベル 5 段階レベルを用いて分類する。国際交流基金・日本国際教育支援協会(2009)によると、N1とN2では「現実の生活の幅広い場面での日本語がどのぐらい理解できるか」、N4とN5では「主に教室内で学ぶ基本的な日本語がどのぐらい理解できるか」、N3はN1、N2とN4、N5の「橋渡し」のレベルであると示されている。これらの基準に照らし合わせた結果、どちらの発話資料においてもすべての期を通して N5,N4 レベルの語彙使用が 90%を超えていることから(図 1～3)、学習時間が増加することにより使用するイ形容詞の難易度が高くなるといった傾向はみられなかった。

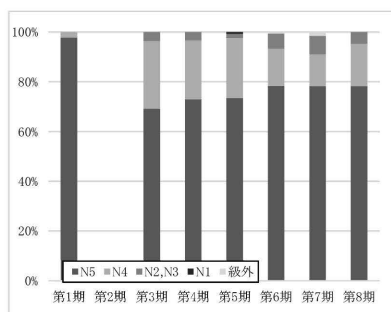


図 1 イ形容詞難易度 (C1)

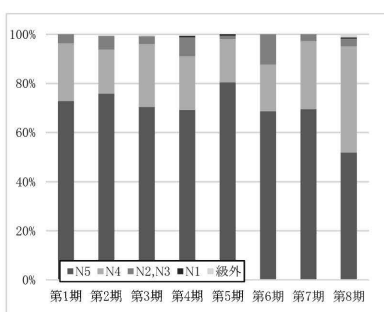


図 2 イ形容詞難易度 (C2)

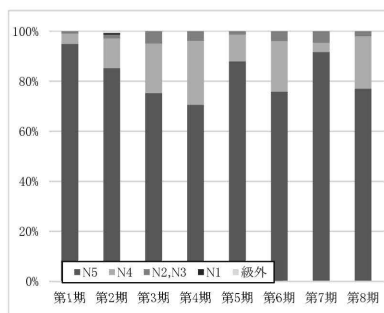


図 3 イ形容詞難易度 (C3)

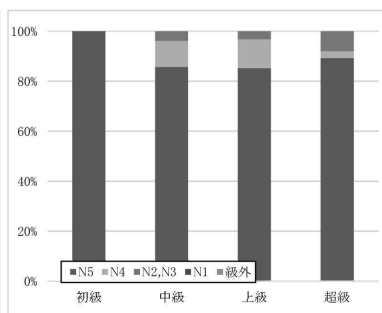


図 4 イ形容詞難易度 (KY コーパス)

KY コーパスの場合、ACTFL(1999)には語彙の難易度という判定基準はないが、レベルが上昇するにつれて場面にあった語彙使用が可能になるため、産出されたイ形容詞の難易度も高くなると予想していたが、実際にはすべてのレベルにおいて N3 以上のイ形容詞の使用はみられなか

った。

4.1.3 イ形容詞の頻度分析

産出されたイ形容詞のうち、どの程度、数多くの種類のイ形容詞を使用しているのか、あるいは同じイ形容詞を何度も使用しているのかについて、表出したイ形容詞の延べ語数における異なり語数の割合を頻度傾向の度合いとして示す。例えば、学習者 A が発話の中で形容詞を 10 語使用し、そのすべてが異なる形容詞であった場合、頻度傾向の度合いは $10/10=1$ である。一方、学習者 B が発話の中で使用した形容詞 10 語のうち、半分は 2 回繰り返して使用していた場合(痛い:2回, いい:2回, 激しい:2回, 新しい:2回, 難しい:2回)は、頻度傾向の度合いが $5/10=0.5$ となり、学習者 B よりも学習者 A のほうが多くの種類のイ形容詞を使用しているという指標になる。

表 5 C-JAS 各学習者別のイ形容詞頻度の度合い

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期
C1	0.43	—	0.34	0.22	0.23	0.24	0.35	0.23
C2	0.20	0.27	0.24	0.24	0.25	0.24	0.21	0.23
C3	0.23	0.24	0.29	0.33	0.34	0.31	0.29	0.32

表 6 KY コーパスイ形容詞頻度の度合い

	初級	中級	上級	超級
中国語母語話者	1.00	0.47	0.32	0.51

C-JAS の場合、頻度傾向の度合いが 0.2~0.4 の間に収まっており、第 8 期までほぼ横ばいとなり、使用する形容詞のパラエティに変化はみられなかった。KY コーパスでは、上級レベルで 0.32 まで低くなっているが、超級レベルで 0.51 と高くなっている。初級レベルで 1 となり、すべて異なるイ形容詞の使用がみられたが、初級レベルでは 4 語しか使用されておらず、そのすべてが異なる形容詞であったためだと考えられる。

約 3 年間の日本語学習により、最終の第 8 期にかけてイ形容詞の頻度傾向の度合いや難易度が高くなると予想していたが、学習者による違いはわずかにあるが、ほとんど変化はみられなかった。

4.2 RQ2 イ形容詞の誤用率の変化と表出した活用形態からイ形容詞の習得モデルの作成

4.2.1 イ形容詞誤用率の変化

誤用率の変化についてはコーパスによる違いがみられ、また C-JAS においては連体用法と終止用法で異なる誤用率の変化がみられた。

C1 の誤用率は第 5 期で最も低くなるが、その後再び誤用率が増加している。この現象は、英語を第 2 言語として学習するドイツ語母語話者が、‘break’の他動詞用法と自動詞用法を身につけ

ていくパターンを示した「U字型曲線」(Kellerman, 1979)と同じ動きをしており興味深い。しかし、それ以外の学習者と KY コーパスをみると、習熟度の上昇にともない、連体用法として表出したイ形容詞の誤用率は減少していく傾向がみられ、KY コーパスでは超級レベルで誤用例がなく、すべて正用として表出していた。

表 7 C-JAS 各学習者別のイ形容詞連体用法誤用率(誤用数/表出数)

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期
C1	50.0% (1/2)	—	30.8% (4/13)	23.1% (6/26)	20.0% (4/20)	27.3% (6/22)	43.5% (10/23)	26.9% (7/26)
C2	43.6% (17/39)	42.1% (8/19)	31.6% (6/19)	41.7% (15/36)	11.4% (4/35)	7.7% (2/26)	21.7% (5/23)	9.1% (2/22)
C3	12.5% (2/16)	17.9% (5/28)	0.0% (0/13)	7.1% (1/14)	12.5% (1/8)	0.0% (0/13)	10.5% (2/19)	10.0% (1/10)

表 8 KY コーパスイ形容詞連体用法誤用率(誤用数/表出数)

	初級	中級	上級	超級
中国語母語話者	75.0%(3/4)	35.0%(28/80)	6.3%(8/126)	0.0%(0/38)

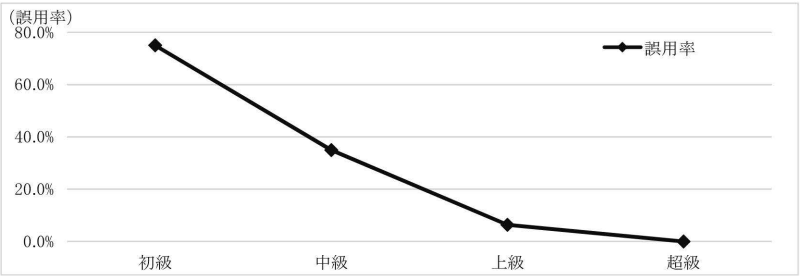
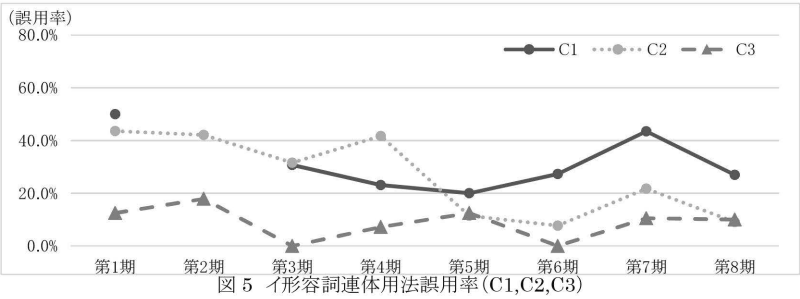


図 6 イ形容詞連体用法誤用率(KY コーパス)

終止用法として使用されたイ形容詞の誤用率は全体的に低く、すべての期で 10%以下となっている。KY コーパスは連体用法と同様にレベルの上昇にともない、誤用率が低くなっている。他方、C1,C2,C3 においては、わずかではあるが誤用率が上昇する傾向がみられた。4.2.2 で詳しく示すが、修飾部に比べ述部では誤用として表出する活用形態の種類は少ないが、誤用の割合が増加していることから、同一の活用形態での誤用を繰り返し産出していると考えられる。

表 9 C-JAS 各学習者別のイ形容詞終止用法誤用率(誤用数／表出数)

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期
C1	0.0% (0/34)	—	0.0% (0/67)	2.5% (3/122)	1.5% (1/65)	6.9% (7/74)	6.8% (5/74)	4.0% (3/75)
C2	1.6% (2/123)	1.3% (1/76)	1.3% (1/80)	3.8% (3/80)	3.4% (3/87)	1.1% (1/791)	6.2% (6/97)	4.4% (2/45)
C3	1.4% (1/73)	1.2% (1/84)	2.8% (2/71)	1.6% (1/64)	0.0% (0/43)	6.3% (4/64)	1.3% (1/75)	7.5% (3/40)

表 10 KY コーパスイ形容詞終止用法誤用率(誤用数／表出数)

	初級	中級	上級	超級
中国語母語話者	8.6%(3/35)	3.3%(8/241)	2.0%(6/302)	1.7%(2/118)

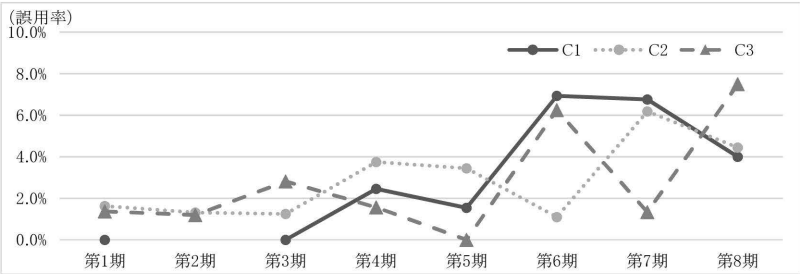


図 7 イ形容詞終止用法誤用率(C1,C2,C3)

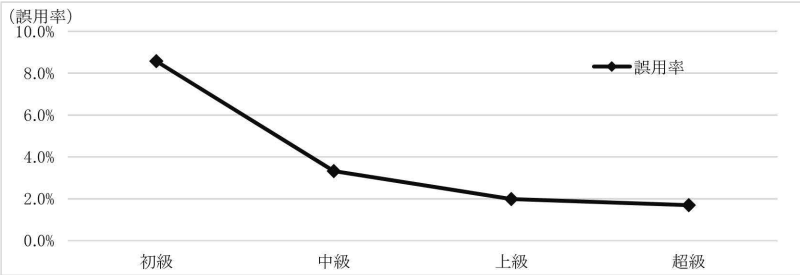


図 8 イ形容詞終止用法誤用率(KY コーパス)

4.2.2 イ形容詞の習得モデル

連体用法として修飾部で使用されたイ形容詞の活用形態パターンと、終止用法として述部に表出したイ形容詞の活用形態パターンを学習者別に表 11,12 にそれぞれ示す。

表 11 修飾部におけるイ形容詞の習得モデル(C-JAS)

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期
	形容詞＋の ＋名詞		形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞
			形容詞＋な ＋名詞		形容詞＋な ＋名詞			
C			形容詞語幹 ＋名詞			形容詞語幹 ＋名詞		形容詞語幹 ＋名詞
1					形容詞語幹 ＋の＋名詞			
						名詞脱落		
							その他	
	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞
C	名詞脱落			名詞脱落			名詞脱落	
2	形容詞語幹 ＋名詞							
				形容詞＋な ＋名詞				
	形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞		形容詞＋の ＋名詞			形容詞＋の ＋名詞	形容詞＋の ＋名詞
C		名詞脱落			名詞脱落		名詞脱落	
3		形容詞語幹 ＋名詞						

表 12 修飾部におけるイ形容詞の習得モデル(KY コーパス)

	初級	中級	上級	超級
KY	形容詞＋の＋名詞	形容詞＋の＋名詞	形容詞＋の＋名詞	
コー		形容詞語幹＋の＋名詞		
パス			形容詞＋な＋名詞	

修飾部においては、縦断的データと横断的データに共通して【形容詞＋の＋名詞】の活用形態パターンの産出が観察された。

- (4) 留学生のための新しいの寮, 新しく一軒建ててます (KY 上級 02) (下線筆者, 以下同様)
- (5) あー, むずかしことあるよ, 作文 (C3 第2期)

活用形態パターン【形容詞＋の＋名詞】は、C-JAS の場合 3 名に共通して最後(第8期)まで産出されており、約 3 年の学習期間では習得に至らず、正用と同時に使用されている。KY コーパスの場合、上級レベルに至るまで活用形態パターン【形容詞＋の＋名詞】の使用が観察されていた。このことから、(4)のような活用形態パターン【形容詞＋の＋名詞】は、中国語母語話者がイ形容詞を連体用法として使用する際に表出する中間言語文法であり、これは習得(中間言語文法が消え

る)までに時間がかかる傾向があることが示唆される。また、(5)のような活用形態パターン【形容詞語幹＋名詞】は、縦断的データにのみ表出し、横断的データでは観察されなかった。中間言語文法とは言えないが、C1,C2,C3 に共通して産出しているが表出時期が異なっている点は興味深い。

述部に表出したイ形容詞の活用形態については、縦断的データと横断的データに共通して【形容詞語幹(い脱落)】と【形容詞＋だ】の二つの活用形態パターンが観察された。

表 13 述部におけるイ形容詞の習得モデル(C-JAS)

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期
				形容詞語幹 (い脱落)		形容詞語幹 (い脱落)	形容詞語幹 (い脱落)	形容詞語幹 (い脱落)
C						形容詞＋だ	形容詞＋だ	形容詞＋だ
1					形容詞 (と脱落)		形容詞 (と脱落)	形容詞 (と脱落)
					形容詞＋な			
	て形混同							
	形容詞＋だ	形容詞＋だ			形容詞＋だ		形容詞＋だ	形容詞＋だ
C		形容詞語幹 (い脱落)	形容詞語幹 (い脱落)	形容詞語幹 (い脱落)		形容詞語幹 (い脱落)		
2					形容詞＋な			
	形容詞 (か脱落)							
C	形容詞語幹 (い脱落)		形容詞語幹 (い脱落)	形容詞語幹 (い脱落)		形容詞語幹 (い脱落)		
3		形容詞＋だ				形容詞＋だ	形容詞＋だ	形容詞＋だ

表 14 述部におけるイ形容詞の習得モデル(KY コーパス)

	初級	中級	上級	超級
		形容詞語幹(い脱落)		
		形容詞＋なん＋です		
		形容詞＋です＋と思う		
KY		副詞的用法と現在形の混同		
コー			形容詞＋だ	形容詞＋だ
パス				形容詞＋であれば

- (6) でも日本人はね、「あ、自分努力してないと、あ、だから、駄目だったの、もうくやし、くやし」
ばかりで (C2 第4期)
- (7) まあ日本よりは、〈うん〉うーん、若干大きいだと思います (KY 超級 05)

活用形態パターン【形容詞語幹(い脱落)】と【形容詞＋だ】の表出時期と表出期間は学習者によって異なっているが、縦断的データと横断的データに共通して観察された。なかでも活用形態パターン【形容詞＋だ】は第 8 期、超級レベルに達しても表出していることから、中国語母語話者にとってこの活用形態(中間言語文法)はなかなか消滅しにくいものであると考えられる。この活用形態は、(7)のように「形容詞＋だと思う」や「形容詞＋だし」(古いだし:C3 第7期)、「形容詞＋だから」(辛いだから:C2 第 8 期 等)の使用例が多く観察されることから(C-JAS の誤用例 50 例中 23 例、KY コーパスの誤用例 19 例中 5 例)、「イ形容詞＋だ」をかたまりで用いていると考えられる。その

理由として、「名詞＋だと思う」や「ナ形容詞＋だし」のように、品詞を混同して産出しているのではないかと推測できるが、この点については改めて検討が必要である。

5. まとめ

本研究は、縦断的データである C-JAS の中国語母語話者データと、横断的データである KY コーパスの中国語母語話者発話を利用し、学習時間の増加、習熟度の上昇にともない変化するイ形容詞の使用頻度や難易度、頻度傾向の度合いの変化を明らかにし、イ形容詞の中間言語文法の実在を探ることを目的として分析した。その結果、イ形容詞の使用頻度や頻度の度合い、難易度は学習時間が増えてもほとんど変化がみられなかった。一方で、中国語母語話者に共通した中間言語文法(修飾部:【形容詞＋の＋名詞】、述部:【形容詞語幹(い脱落)】と【形容詞＋だ】)の存在が明らかになった。これらの中間言語文法は、木下(2017)によると韓国語母語話者にも共通して観察されたという報告もあることから、中国語母語話者に限らず、日本語学習者に共通したものと考えられることもできるが、これらについては、さらなる分析が必要である。また、修飾部と述部に共通して各学習者は 2 種類以上の活用形態を産出していることから、習得に至るまでの過程を「拡散モデル」で説明することが可能であると考えられる。上記の活用形態(修飾部:【形容詞＋の＋名詞】、述部:【形容詞語幹(い脱落)】と【形容詞＋だ】)は中国語母語話者に共通した中間言語文法ではあるが、各学習者はさらに異なった活用形態を産出しながら(拡散しながら)習得に至ると考えられる。

今後は、英語母語話者など他の母語話者にも共通した中間言語文法が存在するのかについて検討することにより、日本語母語話者に共通した中間言語文法の実在を示すことができるのではないかと考える。

付記

本研究は第 3 回アジア圏学習者コーパス国際シンポジウムでの発表原稿を大幅に加筆修正したものである。

引用文献

- ACTFL(1999)「ACTFL 言語運用能力基準—話技能(1999 年改訂版)」<
http://www.opi.jp/shiryo/actfl_guide.html>(参照 2017 年 12 月 9 日)。
 Gatbonton, E. (1978). Patterned phonetic variability in second-language speech: A gradual diffusion model. *Canadian Modern Language Review*, 34, 335-347.
 Hansen-Strain, L. (1993). Language loss over a break in instruction: Negation in the L2 Japanese of American high school students. In Yoshioka K., B. Murdoch, J. Smith and Kato Y. (Eds.), *Proceedings of 4th Conference on Second Language Research in Japan, Vol. 4* (pp. 123-134). Niigata, Japan: Language Programs of International University of Japan
 橋本三奈子・青山文啓(1992)「形容詞の三つの用法:終止,連体,連用」『計量国語学』18 巻 5

号, 201-204.

家村伸子(2001)「日本語の否定形の習得—中国語母語話者に対する縦断的な発話調査に基づいて—」『第二言語としての日本語の習得研究』, 4, 63-81.

Kanagy, R. (1994). Developmental sequences in learning Japanese: A look at negation. *Issues in applied linguistics*, 5(2), 255-277.

Kellerman, E. (1979). Transfer and non-transfer: Where we are now: *Studies in Second Language Acquisition*, 2(1), 37-57.

木下謙朗(2009)「書きことばにおける形容詞の使用状況—複合的な形容表現に注目して—」『明海対照言語学論集』(明海大学大学院応用言語学研究科), 2, 43-50.

木下謙朗(2017)「自然発話にみられるイ形容詞の中間言語文法—韓国語母語話者の場合—」『明海対照言語学論集』(明海大学大学院応用言語学研究科), 17, 25-33.

国語審議会(1952)『これからの敬語』文部科学省.

国際交流基金・日本語国際教育支援協会(2007)『日本語能力試験出題基準(改訂版第4刷)』凡人社.

国際交流基金・日本語国際教育支援協会(2009)『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』<
<http://www.jlpt.jp/reference/pdf/guidebook1.pdf>> (参照 2017 年 12 月 10 日)

Lado, R.(1957). *Linguistics across cultures: Applied linguistics for language teachers*. Ann Arbor, MI:University of Michigan Press.

長友和彦(1993)「日本語の中間言語研究—概観—」『日本語教育』(日本語教育学会), 81, 1-18.

日本語教育学会編(2005)『新版 日本語教育学事典』大修館書店.

野田尚史(2001)「第 3 章 学習者独自の文法の背景」『日本語学習者の文法習得』(大修館書店), 45-62.

坂本正・小山悟(1997)「日本語学習者の文法修正能力」(共著)『第二言語としての日本語の習得研究』(第二言語習得研究会), 1, 9-28.

迫田久美子(1998)『中間言語研究—日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得—』溪水社.

迫田久美子・佐々木(木下)藍子・小西円・李在鎬(2014)『C-JAS(Corpus of Japanese as a second language)構築に関する報告書』(大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター).

Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10, 179-191.

山内博之(2009)「形態素解析に関する提案—日本語教育の視点から—」『代表制を有する書き言葉コーパスを利用した日本語教育研究』特定領域研究「日本語コーパス」平成 19 年度研究成果報告書, 84-93.